

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531097

研究課題名(和文) 児童の性格要因とQ-Uから見た学級経営の視点からの小学校外国語活動研究

研究課題名(英文) Foreign Language Activities at Elementary Schools from the Viewpoint of Pupil Personality and Classroom Management Analyzed by Q-U (Questionnaire-Utilities)

研究代表者

佐藤 博晴 (SATO, Hiroharu)

山形大学・教育文化学部・教授

研究者番号：40235388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校外国語活動、学級経営、児童の性格要因という三者の関係を調査した。学級経営の状態と児童のソーシャルスキルの測定にはhyper-QU質問紙を、児童の性格要因の測定には、小学生用所要5因子性格検査を用いた。結果は、外国語活動の成否は、良い学級作りがその土台にあることが再確認された。また、良い学級風土は、児童個々の性格要因の醸成に寄与していることも分かった。さらには、豊かな心や社会規範、他者を思いやる気持ちを持った児童ほど、外国語活動に積極的に参加し楽しんでいることも明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the relationships between foreign language activities at elementary schools, classroom management, and pupil personality. To clarify the classroom situations and pupil social skills, the author used the hyper-QU, and to diagnose pupil personalities, the Little Big Five Personality Inventory was utilized. The results reconfirmed that the success of foreign language activities at elementary schools primarily depended on a positive and comfortable atmosphere in classrooms. Further, this favorable classroom atmosphere proved vital in improving pupil attitudes. In addition, pupils who exhibited concern for others and social norms were more likely to enjoy and willingly participate in foreign language activities.

研究分野：英語教育学・第二言語習得論・小学校外国語活動

キーワード：外国語活動 学級風土 hyper-QU ソーシャルスキル 性格5因子

1. 研究開始当初の背景

平成 23 年度から小学校で外国語活動が必修化されたが、現場の教員は日々の授業実践を通じて、外国語活動がその成果をあげるためには、学級経営の善し悪しや、その前提となる他者への思いやりを持った児童の育成が他の教科科目以上に大きくかかっているということを実感している。さらには、児童の性格が外国語活動への取り組みや、学級経営に大きくかかわることも感じている。本研究は、教員が外国語活動に対して感じているこのような印象を実証的調査により明らかにすることを目的に計画されたものである。

2. 研究の目的

上で述べた背景を踏まえ、小学校外国語活動の特徴を、hyper-QU 質問紙(河村 2007)と小学生用主要 5 因子性格検査(村上 2011)を用いて明らかにすることを目的とした。hyper-QU 質問紙は、学級経営の状態と児童個人が持っている性格要因の一つであるソーシャルスキルを明らかにするために用いた。また、小学生用主要 5 因子性格検査は、5 因子モデルで性格を構成する基本的次元であるとされている外向性、協調性、良識性、情緒安定性、知的好奇心を測定するために使用した。またマイナスの性格要因としてあげられている攻撃性も調査の対象とした。

3. 研究の方法

(1) 調査校及び被験者

今回、データの提供をいただいた小学校及び被験者は以下の通りである。

A 小学校：仙台市内にある中規模小学校の 5 年 1 クラス、6 年 1 クラス

B 小学校：山形県内にある中規模小学校の 5 年 2 クラス

C 小学校：小中一貫教育で特区申請を受けている東北地区にある小中一貫校の 4 年、5 年、6 年の全クラス

A 小学校及び B 小学校では学習指導要領に規定された通り、5 年生以上に年間 35 時間、外国語活動を指導しているが、特区にある C 小学校は、4 年生以上に年間 70 時間の時数を外国語活動に割いている。またその指導内容は、4 年生は通常行われている英語に慣れ親しませる外国語活動的な内容になっているが、5 年生からは中学校の英語の教科書を前倒しする形で指導しており、かなり教科的なものになっている。

(2) ソーシャルスキルとの関わり

河村(2007)は、ソーシャルスキルを集団形成に必要な対人関係を営むためのスキル・技術のことで、学校生活における適応や良好な人間関係の形成に非常に重要であるとしている。また筆者(2013)は、小学校外国語活動の

ねらいを「コミュニケーション能力の素地」の育成にあるとし、その素地を形成する 2 つの側面の 1 つとして相手の良さを見出し認める「受容・思いやりの心」であることを指摘した。まさにソーシャルスキルは外国語活動により育まれるものであり、外国語活動の成否はソーシャルスキルによって測定可能であると考えた。

ソーシャルスキルの測定には、先に述べた hyper-QU の質問紙を使用した。この質問紙は下に示したような「配慮」と「かかわり」という 2 つの尺度に関する質問から成り立っている。被験者はそれぞれの尺度に関する質問に 4 段階のリカートで答え、その得点の合計とバランス(斜交座標上に表示)から個人のソーシャルスキルが明らかにされる。

本調査では、A 小学校と C 小学校からデータの提供を得たが、次の 2 つの視点から外国語活動とソーシャルスキルの関係を調査した。1) それぞれ 2 つの尺度の得点と外国語活動に対する好き嫌いとの相関関係、2) 2 つの尺度の得点が高くかつそのバランスもすぐれているとされる斜交座標上の最上部 3-3 の領域(ソーシャルスキルが非常に優れている)とその逆の 1-1 の領域(ソーシャルスキルが非常に劣る)にプロットされた児童の外国語活動に対する好き・嫌い得点の比較、である。

「配慮」の質問例：

- ・友達の気持ちを考えながら話していますか。
- ・何か失敗したとき、「ごめんなさい」といっていますか。

「かかわり」の質問例：

- ・みんなと同じくらいは話していますか。
 - ・自分から友達を遊びに誘っていますか。
- (いつもしている 4、ときどきしている 3、あまりしていない 2、ほとんどしていない 1)

(3) 学級経営との関わり

この部分の調査は、佐藤(2010)の追試にあたる。筆者は「総合的な学習の時間」で英語活動に取り組んでいた児童を被験者に、学年が上がるほど英語嫌いが増加すること(3 年生で 5 割→6 年生で 7 割が英語嫌いに)を明らかにした。ただその中でも、英語活動に好意的な態度を示す児童は学級生活に満足していること(3 年では英語活動が好きと答えた児童の 5 割が自分の所属する学級に満足→4 年では 6 割が満足→6 年では英語活動に肯定的な態度を示した児童は 30% しかいなかったが、そのうちの 7 割は学級生活に満足している児童であった)を示し、英語活動を成功させる、実りあるものにするためには学級経営が重要であると論じた。松尾・丸野(2007)も英語活動ではないが、小学 6 年生の国語の授業を観察し、児童が主体的に学びあう学級を実現するためには、相互の意見の違いを認め合い、異質な児童を受け入れるようにすることの必要性、そのためのグラウンド・ルールの共有が大事であることを明らかに

している。中嶋(2000)も英語嫌いができる要因の一つは居心地の良い集団で学べていないこと、学習集団の質が高まらなければ一人ひとりの英語力はつかないことを論じている。またドルニエイ(米山・関 訳 2005)も言語学習に対する動機付けを生み出す条件整備として1)適切な教師の行動と学習者との良好な関係、2)楽しく支持的な学級の雰囲気、3)適切な集団規範を持った、結束的な学習集団の3点があることを指摘している。

学級の状態の調査には、筆者の先行研究(2010)同様、Q-U質問紙(今回使用したhyper-QUと質問紙は同一)の「いごちの良いクラスのアンケート」を用いた。被験者は、不適応感を持っていたり、いじめや冷やかしを受けていると感じているか否かを示す指標となる被侵害得点に関する質問と、自分の存在や行動は級友や教師から認められているか否かを示す承認得点に関する質問に回答(4段階のリカートで)し、被侵害得点(X軸)と承認得点(Y軸)との関係から、「学級生活満足群」、「非承認群」、「侵害行為認知群」、「学級生活不満足群」のいずれかにプロットされる。本調査でも前回同様、「学級生活満足群」と「学級生活不満足群」に属した児童の外国語活動の好き・嫌い得点の比較を行った。

「被侵害得点」の質問例

- ・あなたは休み時間など一人ぼっちでいることがありますか。
- ・あなたはクラスの人にいやなことを言われたり、からかわれたりして、つらい思いをすることがありますか。

「承認得点」の質問例

- ・あなたが失敗したとき、クラスの人からはげましてくることがありますか。
- ・あなたは運動や勉強、係活動や委員会活動、しゅみなどでクラスからみとめられる(すごいと思われる)ことがありますか。

(とてもそう思う・よくある 4、少しそう思う・少しある 3、あまりそう思わない・)

(4) 性格要因との関わり

性格要因の調査には、先に述べた小学生用主要5因子性格検査を用いた。この検査を用いると、児童の性格を構成する5つの基本的次元を個々に数値として示すことが可能となるばかりでなく、標準得点からの開きが大きい次元の組みあわせ(もしくは単独)から、児童の性格が51のタイプ記述文(例:謙虚な人、おとなしい因習的な人、前向きで堅実な人等)として表記される。本調査では、前者の尺度のみを用いて、外国語活動と学級経営の関係を調査した。

4. 研究成果

(1) ソーシャルスキルとの関わりの結果

Table 1には、ソーシャルスキル有・無群とその両群にプロットされた児童の外国

語活動の平均得点が示してある。先にも述べたようにソーシャルスキル有(3-3)とあるのは、他者への「配慮」、他者への「かかわり」両尺度の得点が高く、かつそのバランスも優れた領域を表す。逆にソーシャルスキル無(1-1)は2つの尺度とも劣り、バランスも悪い領域を表す。結果は4つのクラス分しかないが、ソーシャルスキルがすぐれている児童ほど外国語活動に好意的に取り組んでいることが分かる。アンケート用紙は5点満点で点差だけでは違いが見えにくいいためその得点差をパーセントでも示すと、得点差では最低で0.44~最大で1.51ポイント、パーセントでは8.7%~30.2%の差が見られた。

Table 2は、「配慮」「かかわり」両尺度の得点と外国語活動の得点との相関係数を示したものである。Table 1でソーシャルスキルが外国語活動に与える影響を確認したが、Table 2によるとその中でも他者への「配慮」の技術に優れた(もった)児童の方が外国語活動を楽しんでいることが分かる。

Table 1
A小学校とC小学校のソーシャルスキル群の外国語活動好き嫌いの平均とその差

	A小学校5年	A小学校6年	C小学校5年	C小学校6年
ソーシャルスキル有(3-3)	4.06(n=17)	4.71(n=7)	3.82(n=11)	3.77(n=11)
ソーシャルスキル無(1-1)	3.00(n=3)	3.20(n=5)	2.78(n=9)	3.33(n=6)
差	1.06(21.2%)	1.51(30.2%)	1.04(20.8%)	0.44(8.8%)

Table 2
A小学校とC小学校の「配慮」・「かかわり」それぞれの尺度と外国語活動との相関

	A小学校5年(n=40)	A小学校6年(n=27)	C小学校5年(n=66)	C小学校6年(n=58)
配慮	0.40**	0.40*	0.28*	0.27*
かかわり	0.19	0.58**	0.23†	0.06

**p<0.01 *p<0.05 †p<0.10

(2) 学級経営との関わりの結果

Table 3には、学級生活に満足している群と満足していない群にプロットされた児童の外国語学習に対する平均得点が示してある。C小学校の5年生だけは、学級生活の満足群と不満足群の間で、外国語活動の好き・嫌いに差は見られなかったが、他の5つの集団においては全て、満足群にいる児童の方が不満足群にいる児童よりも外国語活動に好意的に取り組んでいることが分かった。これは先に述べた筆者の先行研究(佐藤 2010)を裏付けるものであり、改めて、歌やゲームなど体験的な活動を通してコミュニケーション能力の素地を育てる外国語活動においては、学級経営や学級風土が大きな影響を与えることがうかがえる。得点的には最大で2.18ポイント、パーセントで言うと43.6%も好き嫌いの差が見られたクラスもあった。

Table 3
各小学校の学級生活満足群と不満足群の外国語活動好き嫌いの平均とその差

	A小学校 5年	A小学校 6年	B小学校 5-1	B小学校 5-2	C小学校 5年	C小学校 6年
満足群	4.00 (n=32)	4.18 (n=20)	4.37 (n=19)	3.80 (n=18)	3.51 (n=37)	3.78 (n=49)
不満足群	3.00 (n=1)	2.00 (n=2)	3.50 (n=3)	3.29 (n=4)	3.51 (n=13)	2.67 (n=6)
差	1.00 (20.0%)	2.18 (43.6%)	0.87 (17.4%)	0.51 (10.2%)	差なし	1.11 (20.2%)

(3) 性格要因との関わりの結果

性格要因については特にA小学校5年生のクラスを中心に調査した。このクラスは29名中満足群に27名(93%)が属しており、全国平均38%を大幅に上回っていた。また、英語嫌いの児童は皆無であった。その満足群にいる児童の得点は、外向性で48点、協調性59点、良識性55点、情緒安定性51点、知的好奇心55点であり、外向性を除いて他の4つの性格要因は標準得点を上回っていた。また、マイナスの要因となる攻撃性の得点は43点で、やはり標準点を大幅に下回っている。各要因をさらに詳細に見ていくと、統計学上約15%の人が入るとされる得点55点以上60点未満(攻撃性の場合40点以上45点未満)に入っていた児童の割合は、協調性で22%、良識性で29%、知性で22%、攻撃性で26%となっている。9.2%とさらに該当する人数が限られる60点以上64点未満(攻撃性の場合35点以上40点未満)では、協調性で52%、良識性で19%、情緒安定性で26%、攻撃性で26%となり、さらにその傾向がとて強く6.7%しか該当しないとされる65点以上(攻撃性の場合35点未満)の場合でも、良識性で11%、知性で19%、攻撃性で15%となっていた。本来考えられる人数以上の児童が、それぞれのプラス傾向の枠の中に入っていた。性格要因は生得的なものとして捉えがちだが、この結果は、学級経営が良いと、児童個々の性格要因にもプラスの影響を与え、英語嫌いゼロの学級を作り出すことに成功しているのではないかと推測される。

さらにA小学校、B小学校、C小学校で満足群にしながら英語嫌いとなっていた児童の各性格要因と得点を見てみると、外向性で49点、協調性53点、良識性49点、情緒安定性52点、知的好奇心51点、攻撃性48点となり、A小学校5年生と比較し、同じ満足群にしながら協調性、良識性、知性の得点の低い、かつ攻撃性得点の高い児童は英語嫌いになりやすいことも分かった。

本調査から、外国語活動の成否は、良い学級をまず作ることにあることが再確認された。また暖かで支持的な学級風土は、児童個々の性格要因の醸成に寄与していることも分かった。さらに、豊かな心や社会的規範を持ち合わせた児童は、体験的に友達と関わ

る外国語活動を楽しんでいることも明らかとなった。そしてそのことは、外国語活動は学級経営と児童の人格形成に少なからず影響を与えていることも意味する。

<引用文献>

河村茂雄(2007).『よりよい学校生活と友達作りのためのアンケート hyper-QU 小学校4~6年生用』東京：図書文化社

佐藤博晴(2010).「性格要因が小学校の学級集団形成及び英語活動に与える影響—Q-Uを活用したパイロット・スタディ—」『東北英語教育学会研究紀要』第30号,15-28.

佐藤博晴(2013).「小学校外国語活動のねらいについて」『東北英語教育学会研究紀要』第33号,19-29.

中嶋洋一(2000).『学級集団をエンパワーする30の技』東京：明治図書

松尾剛・丸野俊一(2007).「子どもが主体的に考え、学び合う授業を熟練教師はいかに実現しているのか—話し合いを支えるグランド・ルールの共有過程の分析を通じて—」『教育心理学研究』第55巻,第3号,93-105.

村上宣寛(2011).『小学生用主要5因子性格検査の手引き』東京：学芸図書株式会社

Dorney, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge Univ. Press. [米山朝二・関昭典(訳)(2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』東京：大修館書店]

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

佐藤博晴(2014)「小中連携を視野に入れた英語科教育法の実践」『英語教育学の今 理論と実践の統合』(全国英語教育学会), 査読有, 393-395.

佐藤博晴(2014).「小学校外国語活動の特徴 他教科・ソーシャルスキル・学級経営との関わりから」『東北英語教育学会研究紀要』, 査読有, 第34号, 19-29.

佐藤博晴(2013).「小学校外国語活動のねらいについて」『東北英語教育学会研究紀要』, 査読有, 第33号, 19-29.

[学会発表](計1件)

佐藤博晴「小学校外国語活動の特徴 他教科・ソーシャルスキル・学級経営との関わりから: hyper-QUを活用したパイロットスタディ」第43回中部

地区英語教育学会富山大会，2013年6
月30日，富山大学(富山県・富山市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 博晴 (SATO, Hiroharu)
山形大学・地域教育文化学部・教授
研究者番号：40235388